

優秀賞『濟世の志～教育で未来を創る～』鈴木 心渚

「避難されてくるから、手伝って！」

母の声に促され、余震で揺れる中、部屋を片付け、休める場所の準備をしたのを鮮明に覚えている。父の友人家族が、避難してきた。おじいちゃんも生まれて間もない赤ちゃんも、犬も、皆着の身着のまま逃げてきた。津波と目に見えない敵「放射能汚染」から。桃の香りのする温かいお茶を淹れて差し出すと、涙をこぼされた。子供ながらに大変な事態になっていることを感じた。忘れられないその時の情景は、奇しくも昨今のウクライナのような世界情勢と重なる。深い悲しみがあった。

「明日の夜は、何国（いつこ）の誰か、ながむらん、なれし御城に、残す月かげ」この詩を意味もわからず口ずさみながら遊んだ空き地が、山本八重さんの生家跡だと知ったのは小学5年生の時だった。藩校日新館の流れをくみ、天文台跡や水練場跡も近い小学校に通い、私にとって若松城（鶴ヶ城）は格好の遊び場であり、学びの場であった。150年前、大きな時代のうねりの中、勇猛果敢に戦った八重さんの姿は、石垣の砲弾跡に見て取れる。強い信念と志を持ち、時代を生きた先輩に、私は幼いころから憧れと誇りを持って育ってきた。京都の新島邸をどうしても見たくて訪れた際に、その思いは確信となった。西洋式の生活スタイルを取り入れ、最先端のワッフルを焼く道具を使いながらも、古きよき教えを忘れずに、枠にとらわれずに新しい価値を創り出す精神を肌で感じた。ダイバーシティ、インクルーシブ教育で学ぶ私たちの先駆けであることを改めて感じた。彼女の試みは、強い志が無ければ成立しない。深い悲しみも苦しみも、未来を創る糧とし、前向きに逞しく生きることを教えてもらった。八重さんのように、私が社会に貢献できることは何なのかを、深く考えるきっかけとなった。

教育は心を育て、人を育て、社会を育てる。私の小学校校歌の歌詞には「剣をペンに換え」というフレーズがある。戊辰戦争で儂く散った白虎隊に思いを寄せながらの歌詞である。戦争のない平和な社会を教育で創りたいと心から思う。幼い頃の思いは、生涯続くと思っている。戦争を体験した祖母が教えてくれた、「優しさは全てを溶かす」の言葉がぐるぐると頭の中を駆け巡る。日々の話の中で、戦争は誰も幸せにならず、命と世界平和がいかに大切であるかを深く理解させてくれた。

激動の歴史の中で、翻弄されながらも、貫くことと柔軟に対応することが新しい時代を切り開いていく鍵であり、心美しく生きるという教育が、八重さんの時代から脈々と受け継がれてきた。東日本大震災で疲弊した時代に、生まれ育ったことが疑似体験となった。今まで当たり前と思っていた平和で豊かな世の中も、政治のアンバランスや自然災害で、一瞬にして崩れ去ってしまうのだ。しかし、それでも挫けずに、立ち上がり、前を向き、自己肯定感、自己有用感を持ち、よりよく生きようとする強いレジリエンスは教育でしか創り出されない。教育は人間として豊かに生きる原点なのだと思う。世界中の子どもたちに平和の大切さ、互いに認め合うこと、助けあうことの大切さを教え、個々の存在意義を確かめ合える教育が幼い頃からしっかりと行われることが、世界平和、豊かな人類の未来に繋がると信じる。

私は、教育を学び、国際社会に貢献したい。日本人学校はもとより、海外の学校や施設に行き、日本で学んだこと、思いやりの教育、命の尊さを伝えていきたい。「優しさは全てを溶かす」のだ。わだかまりも対立心も、喧嘩合いも、何もかも負の要素は、人の心の温かさでプラスの要素に変えていける。敵味方関係なく、傷ついた者を、助けた八重さんの心に通じる。八重さんの生き様が教えてくれた、学びたい者誰もが平等に教育を受けることのできる学校を創ることに関わりたい。

一人一人は小さな力かもしれないが、八重さんのように、同じ志を持つ者たちが、社会を変えていける日は必ずくる。そして、明るい未来を創るのだと信じ、博愛と教育の志を高く持ち続け、実現のために努力していきたい。